

高校

◎「巻頭エッセイ」辞書を引く／養老孟司……1
特集 教室で辞典を引く……4

「認識」小崎早苗「キャンパス／宮岡良成」「いろくつ／柳宣宏」
「そぞろ神／風間誠史」「遊び／中西達治」「自分の名前／池田宏」
「与／瀧康秀」「やがて」「おどろく」「森」「Irony」
◎ひざまずく道長「関白殿、黒戸より」の章段をめぐる……
／田口かおる……15

国語

◎俳句の授業／二宮聡……21
◎漢文学習のすゝめ／赤井益久……24
◎私の「現代語」教科書「言語事項」に留意した「表現」授業
／野村耕一郎……27
◎今どきの高校生の語彙力／国語力向上事業研究・語彙力調査から
／鎌倉芳信……30

教育



三

2005年

省

春号

堂

大反響!

国民的小型国語辞典7年ぶりの全面改訂!

新明解国語辞典第六版

新たに1,500語を増補し、収録項目数76,500語。鋭い語釈と豊富な用例に定評
[運用]欄を新設。

山田忠雄(主幹)・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 編

B6変型判<2色刷>



5月新発売
大きな活字の新明解国語辞典第六版
B5判 4,725円

机上版
4,410円

小型版
2,835円

革装版
4,725円

並装版
3,045円

特装版
3,045円

漢和辞典で初! 全用例に現代語訳

全訳漢辞海

戸川芳郎 監修 佐藤 進・濱口富士雄 編
B6判 2,982円 <2色刷>



親字数1万、熟語数5万。
重要な訓読法は句法囲み欄を
設けて丁寧に解説。
最新「人名用漢字」資料付き

古典の学習に、大学入試に最適。
全訳古語辞典の決定版!

三省堂

全訳古語辞典

第二版



鈴木一雄 編者代表 伊藤博・外山映次・小池清治 編
B6判 2,730円 小型版 2,079円
収録語数2万1千語 <2色刷>

辞書は三省堂

東京都千代田区三崎町2-22-14
TEL03(3230)9411(編集)・9412(営業)
<http://www.sanseido.co.jp/>(価格は税込)

辞書を引く

●解剖学者

養老子孟司

(ようろう・たけし)

「**最** 近の生徒たちは、いくら言っても辞書を引かないんですよ、面倒くさいんでしょうね」という話を聞いた。20年近く前の話である。今ではもつと辞書を引く人の数が減っているに違いない。それでは、人々が辞書を引かなくなつたのはなぜか。

私たちは、食べる、歩く、話すなど日常的な行動をほとんど無意識のうちに行っている。たとえば、「ア」と発するとき複雑な筋肉の運動を意識することはない。意識すればたちまち話せなくなる。しかし、発語がもともと意識的なものであることは、外国語の習得時を考えればよい。一方、意識は相手の話や顔の表情などを読みとり、次にどんな話をするかを決める。仲の良い恋人どうしなら、これらもほとんど無意識に行われているだろう。話

の中身より、話すことそのものが大切だからだ。この場合、意識はほとんど会話全体をぼんやりモニターしているだけと言っているくらいである。

私たちの脳は、眼・耳などからの入力処理したのち、筋肉へ出力する働きをしている。一般的に、動物の脳では、このような知覚系と運動系が即座につながり、ループを作っている。しかし、ヒトの脳では知覚系と運動系との間に過剰なものが挟まってしまった。この過剰な部分が言葉を生み出し、意識を発生させた。乱暴に言えば、ヒトの脳は進化的にそのように生じてきたのである。

ヒトでは、無意識的な行動のように知覚系と運動系がすぐにつながっているものもあれば、しばらくたってから出力されるケースもある。このように、入力に応じて出力を調整できることが、ヒトの脳の優れた点である。一方で、これは、知覚系と運動系をつなぐりをあいまいにする。極端な場合、知覚系からの入力の中でぐるぐる回るだけで、一向に出力されない。こうしてループが途切れ、脳は身体を忘れる。それどころか脳は、自身が身体の一部であることを忘れる。

入出力系のさまざまなループを用意し、回転できるようにすること、それが学習ではなかるうか。脳からの出力に応じてさまざまな身体の動かし方を身につけること、それが学習であろう。辞

書を引かない人たちは意識的に引かないのではなく、おそらく引けないのであろう。問題は、辞書を引く引かないということではなく、私たちが身体を忘れたことにあるのではないか。私たちは、最も身近な自然である自分の身体に問い続けるしかない。

●養老孟司（解剖学者）

東京大学名誉教授。専門は解剖学。一九三七年、神奈川県鎌倉市生まれ。著書に『からだの見方』（筑摩書房）、『唯脳論』（青土社）、『涼しい脳味噌』（文藝春秋）、『臨床哲学』（哲学書房）、『バカの壁』（新潮新書）など多数あり、解剖学・哲学ほか、卓越したさまざまな知見を発信している。

現代文の授業中、生徒の机上に国語辞典が載っているのは理想だが、重い、かさばる、使わない等々の理由を挙げて、持ってくる生徒が少ないのは残念である。国語辞典なら、授業が退屈なときに引いて遊べて叱られることもないのに、と思うのだが。だから新しい教材に入るとき、家庭学習で語句の意味調べをさせ、授業中に確認するのが常である。私自身は授業に必ず携行し、事あるごとに引いて読み上げる。教卓の横の生徒が手を伸ばし、勝手に私の辞書を引いていることもある。私が教えている生徒たちは、抽象的な概念を表す語彙が特に苦手である。教材「コインは円形か」(佐藤信夫)では、「認識」「論理」「実証的」などの言葉に拒否反応を示す。一応辞書は引いてあっても、十分理解できず本文解釈の妨げとなっていることが多い。この中で特に「人間の認識一般」「発見的認識」「認識的な思いやり」と繰り返して使われる「認識」については、文章理解の鍵となる語なので、丁寧に確認することになっている。まず「認識」の辞書的な意味を問う。「物事を

【教材「コインは円形か」の授業】

国語辞典で「認識」を引く

●愛知県立東浦高等学校教諭 小崎早苗 (こざき・さなな)

正しく理解すること「他のものと区別すること」等の答えが返ってくる。板書して「認識」と「思うこと」との違いを確かめ、「確認」「識別」等の熟語作りをし、「認識」の意味を認識させる。

次に「自分の認識が——したがって自分の言葉が——」という部分に触れ、なぜ「認識」言葉なのかを考える。「言葉」の意味を調べ始める生徒もいるので、読み上げてもらい板書する。「認識」||「他のものと区別すること」を手がかりに、「認識」と「言葉」の共通点を挙げさせると、「犬」という言葉は、犬を他の動物と区別している」などと意見が出てきて、生徒たちは、言葉によって物が分節されることに気づき始める。このような作業を通じて、彼らは「言葉が認識を示す」ということを多少なりとも実感するようである。

抽象的な語彙の理解には、辞書で意味を調べ、その意味をまた辞書で調べ、という繰り返しを要求されることが多い。たまには国語辞典を開いて一語の解釈に時間をかけ、生活体験と結びつけて実感させる授業も、楽しいと思う。

定時制の生徒に辞書を引かせるのは大変だ。「メンドクセー」「いやだあ」「引いたことないよ」などブーイングの数々。それにも負けず、そなえつきの国語辞典を用意させる。「では、さつそく質問。教科書の文章に出てくるとばなら国語辞典にはのっているだろうか。」とたずねる。「それは当然のっているよ。」

そこで、三省堂『新編国語総合』の教材「もう一つの時間」(星野道夫)をとりあげることにする。ここから「よし、キャンバス(P11L3)」ということばを調べてみよう。ところが「キャンバス」はのっているが、「キャンバス」はのっていないことがわかる。「えー、役に立たない!」という非難の声。実は「キャンバス」は見出し語にはなっていないが、「キャンバス」を引くと「(油絵の)画布。キャンバス。」と出てくるのだ。

ここから、二つのことがわかる。一つは、教科書程度の文章に使われていることばでも国語辞典にすべてがのっているわけではないということだ。

【教材「もう一つの時間」の授業】

国語辞典で「キャンバス」を引く

●東京都立雪谷高等学校校定時制教諭 宮岡良成 (みやおか・よしなり)

ページ数に制限がある以上、あたりまえといえはあたりまえのことだ。新語や流行語は採用されにくい。辞書が流通し始めたときにそのことばが死語になっているかもしれないからである。「キャンバス」はもともと日本語では「キャンバス」だった。画材用語でも「キャンバス」である。「キャンバス」は新しい表記のしかたである。しかし、星野道夫氏の持つ語彙体系ではおそらく「キャンバス」が自然に出てきたのだろう。

もう一つは、今回のように、せっかく語釈にのっていても見出し語を知らなければ(思いつかなければ)たどりつかないということである。こうした現象は外来語だけではない。ところが、現在の電子辞書やインターネットの辞書では語釈からも検索することができるので、「キャンバス」を検索すれば「キャンバス」にたどり着くことができる。だから、こうした心配はいらない。

大事なことは、辞書を引く習慣をつけさせること。生徒相手に苦心惨憺の毎日である。

現代文の授業で短歌を教えようと思う。下調べをしながら、いい歌だなとしばし感慨にふけったりするが、授業には私情はさし挟まない。ほとんどの生徒にとつて、短歌は興味が無い。短歌の授業は海抜0メートルからの登山に等しい。坦々とオーソドックスに授業を進めるにしくはない。

短歌はおおむね文語定型である。おまけに短い。そこで、歌に忠実に散文に直させる。

玄海の春の潮のはぐくみしいろくづを売る声
はさすらふ
岡井隆

「はぐくむ」「はぐく」として、「いろくづ」は、まづわからない。辞書を引くと「①魚などのうろこ。②うろこのある動物。魚・竜など。」とある。「うろこ」と「いろくづ」がどこでどうして同じになったのか。鱗を引くと「古くは「いろこ」という注記がある。これで「いろこ」が鱗になったことがわかる。「いろこ」のある生き物だから魚。ここで、すでに学んだ「羅生門」の知識を持ち出す。門のほとりにたたずんでいた「市女笠」とは、市女笠をかぶった女のこと、つまり換喩であった、

【短歌の授業】

国語辞典で「いろくづ」を引く

●湘南白百合学園高等学校教諭 柳宣宏 (やなぎ・のぶひろ)

と。まあ、言わなくてもいいけどな。

ところで、「いろこ」は、どんなわけがあつて「いろくづ」になつたのか。こういう追求を生徒は好むので、どんどんやらせる。「こ」を引くと「名詞について親しみの気持ち伝える。」とあり、例として「あんこ」。一方、「くづ」は「屑。無用なものとして切り離されたり(略)役に立たなくなったもの。」とある。確かに鱗は食わない。魚とは、役に立たない鱗をつけた生き物であつたか。そう考えると一首が、一気に生彩のない歌に見えてしまう。

ここで和英辞典を引く。鱗は a scale だが、鱗を取る remove the scales。食べるために身から削いで屑となつた鱗の山。それは新鮮であればあるほど光沢を帯びていたに違いない。一片なら「いろこ」、それが集まつた複数形が「いろくづ」ではないのか。そう仮定すると、この歌に歌われた魚は輝かしい色を帯びて見える。かくて「いろくづ」は、南海の春の光をふんだんに感じさせる、この歌のポイントであることがわかうというものである。

『奥の細道』の冒頭は、暗誦されることも多く、「そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るものにつかず」という一節もおなじみだろう。さてしかし、「道祖神」は今でも路傍に見ることのできる神様だが、「そぞろ神」とはどのような神様だろうか。教科書には「なんとなく人の心をそそのかす神」などと説明があるが、そんな神様がいろいろだろうか？ ためしに『詳説古語辞典』を引くと……、載っていない。そう、ほとんどの辞書に「そぞろ神」はないのである。載っていたとしても、教科書の注と同じ様な説明と、『奥の細道』の用例があるのみ。

辞書を引いてもわからない、のではなく、このことからわかってくることもある。つまり、「そぞろ神」なる語は、『奥の細道』以外（以前）には用いられた形跡がないらしい、ということ。だとすれば、どうやら「そぞろ神」という神様は、芭蕉のいわば創作だということになる。「そぞろ神のものにつきて……、道祖神の招きにあひて……」と、対句風にし、誰もが知っている「道祖神」と並べることで、何だかそんな神様もいたような気

【教材『奥の細道』の授業】

古語辞典で「そぞろ神」を引く

●相模女子大学教授

風間誠史 (かざま・せいし)

にさせてしまうのである。これこそが『奥の細道』の魅力であり、芭蕉の詩人としての力なのだ。辞書を超えたところに「文学」の世界はあるのだが、それに気づくために、辞書を引くことが必要なのである。

さて、それにしても芭蕉はどこから「そぞろ神」なる神様を創造したのだろうか。『詳説古語辞典』の「そぞろ」には「すずろ」に同じ」とあるので、「すずろ」を見る。そこには原義や派生した様々な意味が載っているのだが、大事なものは用例である。この語が、どんな文脈で用いられてきたのか。そう思ってみると、「すずろ」の最初の用例に気づく。「むかし、男、すずろに陸奥の国までまどひにけり」(伊勢・一一六)とある。あれ、これは『奥の細道』と関係があるのでは？ これだけで断定はできないが、芭蕉をみちのくの旅に誘ったもののひとつが、『伊勢物語』であり、「すずろに」惑って行った昔男だったのではないか、という想像をめぐらせることはできる。辞書はそんなふうには、作品の読みをふくらませる手助けもしてくれるのである。

日本語で遊ぶことが流行っているらしい。『大辞林』初版で「遊ぶ」を引くと、一番はじめに「仕事や勉強をせず、遊戯などをして楽しく時を過ごす。」と定義してある。ところが三省堂版『古典講読』の『源氏物語』の冒頭部では、「遊び」に「管絃の遊び」という脚注がついている。受験対策では、古語の「遊び」は「詩歌管絃」と、条件反射のように覚えさせるのだが、何故そうなのか、こうなるとのんびり遊んでばかりはいられない。古語辞典の出番である。

『全訳読解古語辞典』第二版は、見出し語に関連して、「語義要説」「読解のために」「参照用例」などいろいろな工夫がしてある。「あそび」には、関連語の最後に「読解のために」がついている。その語義を見たら、同じページの「あそぶ」にも目を通しておこう。(ちなみにこの語は、カラー見出しで、最重要語扱いになっている。「語義要説」「読解のために」「参照用例」全てがついている。)もともとの意味から「管絃・歌舞などの遊び、楽しみ。」が出てくるいきさつがよく分かる。ところで、「遊び」の類語、対義語、縁語はいっ

【教材「源氏物語」「桐壺」の授業】

古語辞典で「遊び(遊ぶ)」を引く

●金城学院大学教授 中西達治 (なかにし・たつはる)

たい何だろう。例えば「遊び」の現代語の類語は「趣味」、対義語は「仕事や勉強」、縁語は「ゆとり」というところか。古語だとどうなるのか。「趣味」の古語は何だ。「仕事や勉強」も、ことはそれほど単純ではない。「詩歌管絃の遊び」のためには、しっかりした技術の習得が欠かせない。「遊びのための勉強」という逆説的な現象が起きてくる。「仕事」の方はいいとして、ではこれを古語に置き換えるとうなるのか。これも結構難しい。思いついた古語を、拾い出して意味を確かめてみると面白いのではないだろうか。「ゆとり」の方はどうだろう。これはそのままいけそうな気がするのだが、さて、古語辞典にあるのかどうか。「ゆとり」という概念、意外に新しいのかもしれない。

時にはこんな古語辞典の利用法はどうだろう。勉強を遊びにかえる。そういえば、「あそび」関連項目の最後には、『梁塵秘抄』の「遊びをせんとや生まれけん／戯れせんとや生まれけん／遊ぶ子どもの声聞けば／我が身さへこそ揺るがるれ」があげられていた。

とにかく漢和辞典を引いてみようというところから、私の「漢和辞典」の授業は始まる。

では、何を引くのか？ 自分の名前を引くのである。最も身近な漢字である自分の名前に使われている漢字を引き、どういう意味があるのかを調べ、どんな思いが込められているのかを考える。その中で漢和辞典を読む体験をする。

次のような項目を用意する。

自分の名前に使われている漢字について

1 なりたちを調べる。

自分の名前の漢字がどのようにできたものかを知る。ここで当然のこととして「形声」ってなんだ？ ということになり「六書」に触れることになる。

2 読み方（音読み・訓読み）を調べる。

ここで常用漢字音訓表にない読みを発見することになる。漢文を学習するうえで、この表外の読みが重要なのである。

3 意味を調べる。

ここでもふだん気づかない意味を発見するこ

【「漢和辞典入門」の授業】

漢和辞典で「自分の名前」を引く

●駒場東邦中・高等学校教諭

池田宏 (いけだ・ひろし)

となる。その意味が自分の名前の意味であったり、込められた思いだったりする。

4 熟語を読み、気に入った熟語を三つ挙げ、その意味を調べる。

これは自分の名前を好きになるための課題だ。かつて「俺の名前めっちゃかっこいいすよ」と大喜びしていた生徒がいた。

5 調べた結果、自分の名前がどういう意味になるかを考える。

二字以上の名前場合は、ここで一字一字の漢字を単語としてその意味の組み合わせを考えることになる。

6 名付けた人が、自分の名前に込めた思いを聴き取る。

もうすでに聴き知っている生徒もいるだろうが、もう一度自分の調べた結果と照らし合わせてみるとおもしろい。

以上が私の「漢和辞典入門」の授業である。「へえ、漢和辞典ってこんなことも載ってるんだ」という発見を期待しての授業である。

古来、日本と中国において、漢字という共通の文字が使われ続けた。そのことが、日本では、中高生の段階から外国生まれの古典を学習できるというすばらしい状況を生んでいることは論を俟たない。例えば、三云堂『高等学校 古典 漢文編』の導入教材の一つ「管鮑之交」では、高校生にとって日常馴染みが薄そうな字としては、「嘗」「賈」ぐらいであろう。その他（原典とは新旧の字体の違い等は存在するもの）見慣れた字ばかりである。このことは無論学習者に大いに強調すべき点である。

しかし一方で、同じ字であっても、日常生活において頻出する語義・用法と、漢文読解において鍵となる語法・句法とが異なる場合も多い。これらの差異を、用例を通して押さえていくことが漢文学習において重要であることを、漢和辞典を用いながら学習者に意識させたい。

例えば、「管鮑之交」の最初の部分、「管仲、字夷吾、嘗与鮑叔賈。分利多自与」に注目すると、「与」が二度使われている。後者は、「あたふ」と読み、

【教材「管鮑之交」の授業】

漢和辞典で「与」を引く

●清泉女学院高等学校教諭 瀧康秀 (たき・やすひで)

「(利益を分ける際、自分に多く)与えた(分配した)」と解すべき例である。『全訳漢辞海』を引けば、「語義」の欄、「上声」動詞の「⑥授ける。

あたへる・アターフ。例玉斗一双、欲与亜父(玉のひしゃく一對を亜父に与えるつもりである(史記)の「与」と同様の意味であることを確認できる。これは日常馴染みの語法といえよう。一方、

「与鮑叔」の「与」は、「く」と読む例であり、「与」の句法の一つである。前置詞の説明に「①」ともい。▼句法3」とあり、句法3には、「い

いっしょに何かをしたり、動作が関係する対象を表す。例与操有隙(曹操と仲たがいでいた(資治通鑑)」とある。「与操」の「与」は「動作が関係する対象を表す」の根拠を示している。「いっしょに何かをしたり」の直接根拠となる例文は省かれていますが、「与操有隙」と比較すれば、「与鮑叔賈」の「与」こそ、この解説の根拠となる用例の一つであることがわかる。

比較の眼差しを持たせ、あくまで漢文の用例に即して語法・句法を理解させたい。

『新明解国語辞典 第六版』で「やがて」を引く

年が改まり仕事が始まって間もない日のこと、「とんし」の「とん」に「て」と書いて何と読むのでしょうか、今読んでいる鷗外の文章にさかんに出てくるのですが、という読者からの電話を受けた。「頓死」の「頓」だから、「頓て」？

『新明解国語辞典 第六版』で「やがて」を引く。まず、一般的な漢字表記が「躑て」であることを確認。少し寄り道して漢和辞典を引けば、「躑」は「身」に「應(応)」を組み合わせた国字で「自分ですぐに応じる」意であることがわかる。『大字典』には、「身に応じてやがて行う義なり。故に身に應を合す」と明解だ。

語釈を読む。①事が進んで、あまり時間が経過したとは感じられないうちに△新たな局面を迎える(最終的な局面に至る)様子。「帰っていく友達の後姿は次第に小さくなり、見えなくなった/子供たちも成長し親もとから離れていく」②「雅」その状態のまま、時を置かず次の事態に移行する様子。「起きも上らず病み臥せり」

比較のために他の辞書を引く。すると、「そのうちに。おいおい。まもなく」「おっつけ。まもなく。ほどなく。そのうちに。早晩。今に。」と、見事なまでにどの辞書も似た言葉で置き換えているだけ。「まもなく」を引けば「すぐに。ほどなく」と、いつまでたっても意味がわからない。

『新明解国語辞典』に③「雅」があるのはなぜだろう。用例の「やがて起きも上らず病み臥せり」は竹取物語。徒然草「名を聞くより、やがて面影はおしはからるる心地するを：」、「やがて死ぬけしきは見えず蟬の声」という芭蕉の句も思い浮かぶ。なるほど「やがて」③では実感がわかない。意味に変遷があったことがわかる。③から①を見ると、「やがて」の中心義が、経過した実際の時間の長さが問題なのではなく「あまり時間が経過したとは感じられないうちに：」にあることがよくわかる、「まもなく」との違いも明らかだ。さて、問い合わせの「頓て」。「頓」は「頓服・頓死」で「すぐに。にわかに」の意。なるほど、それで「頓て」か。鷗外に限らず江戸・明治期にこの表記が盛んに使われていたのもうなずける。

(辞書編集担当者 吉村三恵子)

『三省堂 全訳読解古語辞典』で「おどろく」を引く

いわゆる「古今異義語」は、古典の初学者をまま悩ませる類の語であると思います。注意を怠ると推理小説のミスリーディングではありませんが、とんでもない方向に訳文を引つ張って行ってしまう。

「さうざうし」のように、音だけは似ていても意味は現代語の「騒々しい」とは真反対というような語はまだしも、中には現代語の語義で訳を試してみたところ、一見正しそうに見えるという始末の悪い語もあります。「おどろく」もそういう語のひとつでしょう。

「おどろく」を『三省堂 全訳読解古語辞典』で引いてみましょう。冒頭に「語義要説」欄があります。この欄の基本的役割は、語の全体像を読者に示すことにあります。「物音や外的刺激に対してはつとする意が原義」とまず、原義を述べ、さらに「現代語と同様に「びっくりする」の意で用いられることもあるが、多くは不意をつかれてはつと気づく、眠っているときにはつと目が覚めることをさしている」と続きます。「おどろく」の全体像はこれで十分把握できると思います。この後に、語義リストが示されます。

- ①びっくりする。
- ②はつと気づく。
- ③はつと目覚める。

本解説の語釈に続く用例を見てみましょう。②の例は「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」です。②の用例の定番といえる和歌ですが、この例に初めて出会った時「風の音にびっくりさせられた」という線で訳した人は少なくないはずですが、実は私も高校時代にみごとにひっかかった口です。既知の語と思える語も、一応は辞書を引いてみるのが大事という「教訓」を得たわけです。

③の例「物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり」〈源氏・夕顔〉にしても、「物の怪」と「びっくり」の相性が良いので、この部分だけに飛びついて間違えてしまうことは皆無とはいえません。

古今異義語は、確かに初心者に酷なところがあります。しかし、電子辞書の早引きなどは、ちよつとひかえて、「語義要説」などを少しまったりと読むなどして、「こんな意味があったのか」などと、驚きとして受け止めるならば、古典への扉がひとつ開くのではないでしょうか。

(辞書編集担当者 加賀山悟)

『全訳 漢辞海』で「森」を引く

品詞は辞書記述の根本です。英語辞典や国語・古語辞典など、品詞表示のない辞典は考えられないでしょう。しかしながら、漢和辞典はどうでしょうか。不思議なことに、品詞表示を示す辞書はごくわずかです。これの一つには、漢和辞典が、伝統的な漢文訓読法を重視し続けてきたことによるものでしょう。

『漢辞海』の編纂は、そういった「伝統」に対する反省から始まりました。「漢字を単に和訓に置き換えるのではなく、漢語 (Chinese word) として捉え、適確な例文から、実際の文脈にそって語義を読解する。したがって、古漢語を品詞別に分類し、文法をふまえた読解をほどこし、用例は現代日本語訳で、『全訳』した。『漢辞海』の巻頭に、監修 戸川芳郎先生のその決意が示されております。

実際に、73ページの「森」をひいてみましょう。私たちが日ごろ普通に理解しているところでは、「森」は、木々が林立して鬱蒼とした、名詞としての「も

り」ではないでしょうか。しかしながら、「森」の「語義」欄に明示された品詞区分には、形容詞と動詞は示されていませんが、肝心の名詞がありません。あれっ、と思っ
てよく見てみますと、「語義」解説の後半、「なりたち」欄のさらに後に「日本語用法」欄があり、ここに名詞としての「もり」が示されています。つまり、漢語本来の用法としては「森」は形容詞または動詞として意識されるものであつて、名詞としての「森」はあくまで日本語独自の用法である、ということが、明確に峻別されて示されているのです。換言すれば、漢文の教材や入試問題で「森」が出てきた場合には、あくまで形容詞ないし動詞として扱うべきであつて、決して名詞として扱ってはいけない、ということになります。これは、古漢語文法に基づいた品詞別に語義を分類して解説した『漢辞海』でなければできない理解法といえるでしょう。

漢字 (漢語) に対して真正面から取り組んだ唯一の漢和辞典『漢辞海』は、漢字の奥行きを再認識させ、学習指導の重要な基礎の一つとなり得るものと、確信しております。
(辞書編集担当者 武田京)

『ウィズダム英和辞典』で

「Irony」を引く

漱石作品には、吃驚^{びつくり}、当面^{まのあたり}に、判然^{はつぜん}といった、独特のルビが頻出するが、カタカナをあてたものも多い。
 『それから』には、洋燈^{ランブ}、燐寸^{マツク}、絹帽^{シルクハット}などが出てくる。肉匙^{フクリ}、肉刀^{フキナ}などは、仮に当時の読者がこの外来語を知らなかったとしても、漢字表記によって用途や形態がイメージできたろうと思わせる。

ほかにも、牛酪^{バタダ}があるが、これなどは、英和辞典で butter を引いてもカタカナしか得られないことを思えば、なかなか工夫のこらされた表記と言えそうだ。

ルビではなくカタカナ語がそのまま使われていると、前例のような漢字によるイメージ喚起がない分、読者にはその意味するところが伝わりにくいことがあるかもしれない。

たとえば『ころ』には、アイロニー、イゴイストなどが出てくる。いずれも、カタカナ語としては通常使用の範疇だろうが、高校生ほどの程度イメージできるだろう。また、日本語作品で出会ったカタカナの意味不明語をどのように調べるだろう。

英語辞典で調べるとはまずないだろうが、ここでは試みに前者を引いてみよう（その場合、綴りが問題になるが、国語辞典を先に引いておけば、irony は簡単に得られる）。

『ウィズダム』では、irony は、先の butter とは違い、「アイロニー」で済まされることはなく、訳語「反語法」があり、語の解説も与えられている。

用例を読めばその使い方や語のイメージがよりはっきりわかるし、「知らないふりをする」という語源であることも示されている。抽象的でわかりにくい概念語の説明が、多面的に補われているのだ。

数項目先の形容詞 ironical に気づいて、その用例も併せて見れば、さらにこの語のもつニュアンスがつかみやすくなるだろう。

二か国語辞典⇨英和辞典は、一か国語辞典⇨国語辞典と違い、語の「説明」ではなく、「置き換え」をしているに過ぎない、などと言われることがある。たしかにそうした一面はあるだろうが、そんなふうに決めつけてしまうのはもったいない。「国語」を「英語」辞書で引いたついでなのである。

(辞書編集担当者 木村匡志)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ひざまづく道長

「関白殿、黒戸より」の章段をめぐって

●都立北多摩高等学校教諭

田口かおる

(たぐち・かおる)

盛儀の中関白家

いわゆる『枕草子』の日記的章段は、中宮定子を中心とした周辺世界へのオマージュである。清少納言が間近に道隆の全盛期に接していたのは、出仕した正暦四(九九三)年の初春もしくは初冬から、長徳元(九九五)年四月の二年前後に過ぎない。しかし、その後の記事に道隆一族の没落と道長一族の台頭の過程ででてきたであろう政治的なこととがらや不如意は直接的に描かれることはなく、ひたすら中宮への讚美が印象づけられるのが『枕草子』の世界である。中でも中関白家全盛期を表した章段は、(注)その華やかさ明るさを具体的場面として再現し、そのこと自体が中宮讚美となる構図となっており、そのような場面では作者は場面に登場するというより、場面を見る「視点」として

の役割に徹するという体である。「関白殿、黒戸より」の段は、まさにそのような趣で展開していく。

関白殿、黒戸より出でさせたまふとて、女房の、ひまなくさぶらふを、

「あな、いみじのおもとたちや。翁を、いかに笑ひたまふらむ」とて、分け出でさせたまへば、戸口近き人々、いろいろの袖口して御簾ひき上げたるに、権大納言(＝伊周)の、御沓とりて、はかせたてまつりたまふ。いともものしく、きよげに、よそほしげに、下襲の裾長く曳き、ところ狭くてさぶらひたまふ、「あなめでた。大納言ばかりに沓とらせたまつりたまふよ」と見ゆ。(『新潮日本古典集成』第二三段。以下、本文・章段数も『集成』による。カッコ内は筆者注。)

道隆の「猿楽言」で始まる、引用部のポイントはもちろん権大納言伊周が道隆に「御沓とりて、はかせたてまつりたまふ」という異例さである。伊周の「いともものしく、きよげに、よそほしげに、下襲の裾長く曳き、ところ狭くてさぶらひたまふ」姿のすばらしさを描写した上で、本来蔵人頭の役目である沓の世話を大納言ほどの高位の方にさせる道隆への讚辞として、作者は「あなめでた」と記す。

(注) 田畑千恵子氏によれば、中関白道隆の生前・全盛期に取材する長徳元年四月までの章段群を前期章段、中関

白家没落後の年時を扱ったものを後期章段とした時、前期章段には、「叙述性」を特徴とした後期章段に比して次のような特徴が見られるとされる。

- (1) 衣装描写・容貌容姿に関する描写をもつこと。
- (2) 詳細な情景描写があること。
- (3) 登場人物の直接話法の多さ。
- (4) 「めでたし」「をかし」が(1)や(2)（章段の中に再現された場面全体）といった外面的な美の評価として多用されること。

「純粋な中宮讚美・一個の人格としての中宮に対するひたむきな讃仰等が、単独で主題を形成する章段」はむしろ後期章段にあり、定子・道隆・伊周といった主家の人々によつて、具体的な盛儀（暦日表現も多い）や日常生活の一駒が、臨場感のある場面として紙上に再現される「場面性」の豊かさが前期章段の特徴であるとされるのである。

さらに、「関白殿二月二十一日に〔積善寺供養・二六〇段〕「淑景舎、春宮にまゐりたまふほど」（九九段）」といった道隆の全盛期を記した段では、「栄華の当事者自身がそれを見る視点」を導入し、道隆が捉えた情景を道隆自身が評価（満足感の表出としての^{〔注3〕}「猿楽言」など）し、作者が「めでたし」と統括するといった方法が見て取れると言われる。

本章段は全体的にも前述の二つの長大な章段に比して非常に短く、(3)に若干の不足はあるが、田畑氏の前期章段の

特徴を具備しているといえ、冒頭（引用部）からまさしく全盛期の中関白家の姿を呈示している。

道長登場の位相

続く場面、のちに栄華を誇る道長が、この道隆全盛期の盛儀の場に登場する。この段は『枕草子』全編を通して道長が登場する唯一の段である。

山の井の大納言（＝道頼）、その御次々の、さならぬ人々、黒きものをひき散らしたるやうに、藤壺の堀のもとより登花殿の前まで、居並みたるに、ほそやかになまめかして、（道隆方）御佩刀などひきつくるはせたまひ、やすらはせたまふに、宮の大夫殿（＝道長）は、戸の前に立たせたまへれば、「居させたまふまじきなめり」と思ふほどに、すこし歩み出でさせたまへば、ふと居させたまへりしこそ、「なほ、いかばかりの昔の御行なひのほどにか」と、見たてまつりしこそ、いみじかりしか。

「黒きものをひき散らしたるやうに」黒い袍を着た四位以上の高官が多数参加した大々的な行事のようであるが、ここには暦日表現もなく、季節も示されていない。何の行事であるかも一切示されていないが、時期については、道隆の関白在任時、清少納言の出仕時期、伊周・道頼・道長の官職から、清少納言の出仕した日以降、正暦五（九九四）

年八月二十八日より前のある日(次頁表のCの期間中)と推定できる。(次頁の表のように伊周と道頼が共に大納言であった時期はないから、このとき道頼は大納言ではなく中納言である。)というより、ここで明確なのはこの登場人物たちの官位と政治的位置だけであることに注目しておきたい。

ここで描かれるのは、宮の大夫殿道長が道隆にひざまずいた出来事である。正暦元(九九〇)年十月中宮大夫に任じられていた道長は、翌年九月ようやく権大納言となるが、同じ年には伊周は父の威光によって一気に権中納言になっている。「競射」など、『大鏡』の記事などに描かれる道長像からも、作者が「居させたまふまじきなめり」と感じたことは首肯せられるが、その道長をひざまずかせた道隆を「なほ、いかばかりの昔の御行なひのほどにか」と讃える構図になっている。さらには、このエピソードが以降のこの場面に登場しない定子との話題になり、段の最後には定子没後の「まいて、この後の御ありさまを見たまつらせたまはましかば、『ことわり』と、おぼしめされなまし。」という評言を導いており、これらからも作者が描きたかったのはこの出来事といえるだろう。

このエピソードは、道隆を讃え、そのすばらしさを作者が統括するという手法において伊周のエピソードと同質かのように見える。しかし、その位相は大きく異なっている。

(注4) 渡辺久寿氏は前述の「関白殿二月二十一日に」の段

(次頁の表のA)を分析して、田畑氏が前期章段の特徴としてあげられた要素を並べるだけで、作者が「めでたし」と殊更言わなくても道隆の威光は表現されており、「作者としての主体を作中に確保せずとも書ける構造」になっているのに対し、「淑景舎 春宮にまぬりたまふほど」の段(次頁の表のB)では「めでたし」の語に内容以上の栄華を無限定に力説する虚構的機能が見られるようになっていると述べられ、この段を「栄華から没落へと推移する過渡的章段」と位置づけられた。(前年に道隆の病悩Ⅱ表の★があり、この年に亡くなっている。)

本章段に即して言えば、引用部前半の伊周のエピソードはその描写のみで「栄華」を描くに事足りており、主家一族の勢揃いをもって華やかな盛時を現出する「絶対的」手法による表現といえ、「あなめでた」の語も順接的に付与された言といえる。翳りなき絶頂期を表すのであればこのエピソードをもって充分表現しえたはずである。

しかし作者はさらに道長を登場させ、道隆にひざまずいたエピソードをわざわざ記している。ここでは居並ぶ四位以上の高官たちと同様道長もひざまずいたことが描写として描かれたのではない。作者が「居させたまふまじきなめり」と思った道長が、道隆の前にひざまずいたというのであり、道長ほどの人をひざまずかせる道隆を讃える作者の評言によってこのエピソードの意味が方向付けられている。時期では明らかに積善寺供養(表のA)と重なる絶頂期、

996 (長徳2)	995 (長徳元)	994 (正暦5)	993 (正暦4)	992 (正暦3)	991 (正暦2)	990 (正暦元)	989 (永祚元)	
	4/10 死 2/5 関白辞表 (43)	★11/3 病気 A 2/20 積善寺供養 (42) (中宮・詮子行啓)	3月 次女 原子入内 (41)			10/5 定子中宮 5/26 関白撰政 (38) 5/8 関白 (38)	1・2月 長女定子 入内・女御 2/23 内大臣 (37)	道隆
4/24 大宰権帥 (23)	1/16 花山院に矢を射かける (長徳の変)	3/9 内覧 (22)	8/28 内大臣 (21)	8/28 権大納言 (19)	9/7 権中納言 1/27 参議 (18)			伊周
	6/11 死 (25)	8/28 権大納言 (24)			9/7 権中納言 (21)			道頼
	6/19 右大臣氏長者 5/11 内覧 (30)		いづれの1日 C		9/7 権大納言 (26)	10/5 中宮大夫 (25)		道長
12/16 定子脩子内親王出産	5/1 定子出家 4/27 関白 5/8 死 道兼 (35)	8/28 右大臣 道兼 (34)	清少納言 (この年の初春または初冬) 出仕		9/7 内大臣 道兼 (31)	7/2 兼家死 (62)		その他

() 内の数字は年齢

前期章段に位置する本章段だが、作者が「視点」としてのみ機能し、場面の叙述に徹するというありかたではない。ここで宮の大夫として登場する道長はもちろんのちの権力者であり、後半部の展開によれば、のちの政界の権力構造を背景にして「相対的」に盛時を逆照射するという、他の段に比して異質な表現となっている。この表現には、前述の渡辺氏が「過渡的章段」に頻出する「めでたし」と同等またはそれ以上に「栄華を無限定に力説する」叙述意識が働いているといえ、絶頂期の記事でありながら、翳りを内包した表現になっているといえるのである。

このことはどんな意味を持つのだろうか。

後日譚の時期

「関白殿、黒戸より」の段後半は、前半の記事をどのよう^①に受けるかという点でいくつもの解釈が存在し、一定の説を見ていないといつてよい。解釈上のポイントは次の①～⑤の部分である。

中納言の君の、①「忌日」とて、くすしがり、行なひたまひしを、②「賜へ、その数珠しばし。行なひして、③めでたき身にならむ」と、借るとて、集まりて笑へど、なほ、いとこそめでたけれ。

御前に、きこしめして、

「仏になりたらむこそは、④これよりはまさらめ」

とて、うちゑませたまへるを、また、めでたくなりてぞ見たてまつる。大夫殿の居させたまへるを、かへすがへすきこゆれば、

「例の、⑤念ひ人」

と、笑はせたまひし……。

まいて、この後の御ありさまを見たてまつらせたまはましかば、「ことわり」と、おぼしめされなまし。

紙面の都合上、主な解釈を整理すると次のようである。

時期	⑤	④	③	②	①	
行事直後	道長	関白	来世のすばらしい身の上	道隆の猿樂言	中納言の君の親族の命日	旧全集
道隆没後	道隆	関白	関白のような立派な身	他の女房の言	道隆の命日	集成
道隆没後	道長	中宮	中宮様のような身	作者の言	中納言の君の近親の命日	新大系
行事直後	道長	関白	関白のような立派な身	作者の言	中納言の君の近親の命日	新全集

大きな違いは、最後の評言を除き、この後半部の後日譚を道隆の死後の出来事とするか、前半部の行事からそう遠くなく絶頂期の出来事としてとらえるかにある。

詳細を述べるゆとりはないが、この記事について言えば描写のみで自立するまでの記事ではなく、波線部「めでたし」の語のみが目立つ。道隆を讃えるため道長がひざまずく様子を繰り返し返した作者に、定子が道長を「例の念ひ人」と切り返すとみれば、定子の機知、明るさが出て「完」とはなるが、「行なひして、めでたき身にならむ」の発言を皆で笑うことについても、定子が「仏になりたらむこそ、これよりはまさらめ」といったことについても何が「めでたし」か「めでたくなる」のか明確でないのであって、前期章段の書きぶりではない。

しかし記事を道隆死後の没落期の出来事とした時、『集成』説では女房たちの不謹慎なやりとりを定子に伝えることは告げ口めいてかえって定子を悲しませることとなり、道長の行為を思い出として繰り返すことよって、逆に現在の不如意が浮き彫りにされ、道隆讃美は空虚に響いてしまふこととなる。『新大系』説も、前の行事で道長がひざまずいた際「なほ、いかばかりの昔の御行なひのほどにか」と感じた作者が、道隆没後の不遇であつても「現世で中宮となつた定子のようなすばらしい身の上になりたい」と言つたエピソードを定子に伝えたとすれば、その後の「仏になりたらむこそ……」のことはやはり不遇を浮き彫りに

にするように思われる。

このように考えると、後半は『新全集』のように前の行事からそう遠くない時期、道隆の全盛期といえる頃の定子とのやりとりと考えるのが妥当であろう。とすれば、表現方法を規定しているのは記事の時期ではなく、その構成意識であり、本章段について言えば末尾の評言が明確に指向するように、中関白家の栄華の翳りを投影して道長の栄華から逆照射する表現意識が全体を貫いていると言えるのではないか。本章段は、『枕草子』が道隆一族の華やかで明るい世界を現出しながら、あからさまには語らない主家一族の運命の変転を引き受けつつ表現する意識がかいま見える章段である。

注1 三田村雅子氏「枕草子の表現構造―日さしと宮仕え讃美と―」他『枕草子 表現の論理』有精堂一九九五・

二所収の一連の論文

注2 田畑千恵子氏「枕草子日記的章段の讃美の構造―朗詠と伊周像をめぐって―」『中古文学論攷』第六号一

九八五・十「枕草子日記的章段の方法―中関白家盛時の記事をめぐって―」『中古文学』第三十六号一九八六・三他 一連の論文

注3 『枕草子』で、道隆の「猿楽言」が描かれるのは「関白殿二月二十一日に」の段、「淑景舎 春宮にまゐり

たまふほど」の段とこの段のみ。

注4 渡辺久寿氏「日記回想章段 栄華から没落へ・その「過渡的章段」をめぐって」『国文学』一九八八・四

俳句の授業

●東筑紫学園高等学校教諭

一宮聡

(にのみや・さと)

■はじめに

現代文の韻文教材は嫌だ。詩も短歌もできればやりたくない。まして俳句となると生理的に受け付けない。そんな国語教師もいるのではないでしょうか？

大根の葉が流れようが、牡丹の花が落ちようが、「それが何なの？」と突っ込まれるともう自信喪失です。指導書に書いてある内容はどれも似たようなもので、俳句を扱う時だけはすべての教師が山本健吉になって鑑賞を押しつけています。

かといって生徒に俳句を作らせてみても、放っておくと「標語コンテスト」になりかねません。いつそ教科書の制約を離れて、ゲーム感覚で俳句が教えられないものかと考えてみました。「俳句は、ある情報を最小限の言

葉で伝達するゲームである」という定義のもとに、授業を展開していくのです。

■まずは俳句への興味を

俳句といえは五・七・五に季語がつきもの。「や」とか「かな」とかの切れ字をトッピングして、出来上がったものはよくわからない…。と生徒は思っています。ここは自由律俳句に登場してもらって、生徒の興味を喚起しましょう。

授業の中でよく話題になるのが、「一番短い俳句は何か？」ということ。少し知っている生徒なら、尾崎放哉の「せきをしてもひとり」を挙げるところですが、種田山頭火に「雪はしぐれか」というのがあります。さらに探せば、橋本夢道の「動けば寒い」。さすがにこれが最短だと思っていたら、ありました凄いのが。

陽 へ 病 む (大橋裸木)

こうなる鑑賞するというより、そのインパクトに脱帽するしかありません。

ここまで話すと、「じゃあ、『あ』という俳句を作れば記録更新だ。」などと言う生徒が必ず出てきます。そして、「しめしめ、つかみはOK!」と教師はほくそ笑むのです。

一文字に勝る文芸はないだろうと思っても、世の中そんなに甘くありません。俳句ではありませんが、草野心平の詩にとんでもないものがあります。(御存知ですか) 題は「冬眠」。内容(?)は、ページの真ん中に「●」だけ。それでも十分に「冬眠」という情報を伝えているからさすがです。

■オノマトペで感性を磨く

後述の解説を読んで、次の俳句の空欄に入る擬音語を考えなさい。(平仮名で書くこと)

鳥わたる [] と罐切れば (秋元不死男)

敗戦の傷跡も生々しい秋空の下、戦時下の獄中生活から解放された作者は、解放感を嘯み締めつつも、今日を生きんがために缶詰を切る。その物悲しい響きは空を行く渡り鳥の羽音にも通じるようであり、生の哀感を滲ませている。

句の背景を先に教えるのは反則のようですが、こと俳句に関しては、先付けもあります。正しい鑑賞よりも、言葉のセンスを重視しましょう。(正解は「ききききき」)

生徒A：「ききききき」

多数派の回答です。作者の感性に近いようですが、「ききききき」では金属的な響きが耳につき、いまひとつ角が取れていない気がします。

生徒B：「まこまこまこ」

一見ふざけているように見えて、徳用のパインの缶詰の、あの胴太の空間に共鳴する音の響きがよく表現されています。

生徒C：「きりきりきり」

「ききききき」よりも大らかな音です。きつこの生徒の缶詰の直径は七寸五分でしょう。(冗談です)

生徒D：「ばかんばかん」

一瞬?…しばらくしてはたと気付きました。今の生徒たちは、缶詰を使うことはないのですね。ほとんどがプルトップ缶ですから。追体験が難しい句を教えるのは大変です。「水枕ガバリと寒い——」も解るかどうか。

■さまざまな比喩の可能性

次の俳句の空欄に入る言葉を自由に考えなさい。

[]のごとく汗して歩くなり

この問題は私が考えたものなので、正解は無限にあります。何人かの生徒を指名していく中で、次第に表現に深みが出てきました。

生徒E：「夕立」—— 月並みですね。

生徒F：「スイマー」—— 濡れるだけじゃん。

生徒G：「暑い日」—— 暑いから汗でしょうが。

生徒H：「サラダ油」—— なかなかいいですね。

このあたりから生徒の回答は、濡れている状態よりも汗そのものの比喩に向かっていきます。「水飴」「泥水」「シャンプー」「粘液」と、総じてヌルヌル感や気持ちの悪さを表現しようとしているようです。教師はあえてコメントをせず、事の成り行きを見守りましょう。そして、生徒I：「肉汁のごとく汗して歩くなり」

最後にいい比喩が生まれました。真夏の暑い日、汗だくで歩いている時の不快感がよく表現できていて、「肉汁」という短い言葉の持つ情報量はかなり多いのではないでしょうか。

■「エチュード」で創作を

演劇では、提示されたシチュエーションで即興の芝居を演じる練習を「エチュード」と言います。授業の仕上げとして、このエチュードに基づいた俳句作りをさせましょう。文章にすればかなりの量になる情報を、いかに

短く表現するか。そこには俳句の眼目である「省略」の力が必要になります。

あなたは真夏の喫茶店で、恋人を待っています。約束の時間はとくに過ぎていないのに、恋人はやってきません。そんな時の気持ちを、俳句で表現してください。（五七五の定型で詠むこと）

生徒には、あらかじめ夏の季語の一覧を配布しておきます。「有季定型」というオーソドックスな形での創作が、表現の制約をより多くし、生徒にある種の緊張感を与え、ことができるからです。

授業の様子や個々の生徒の作品を述べるには紙面が足りません。多くは「恋人を待つや真夏の喫茶店」のような状況説明だけの駄句でした。しかし、クラスに四、五人は「俳句」と言えるものを作っています。ここでは一番評価の高かった句を紹介してこの文章を終ることにします。「ある情報を最小限の言葉で伝達する」という最初の定義にどれだけかなっているか、皆さんで判断してください。

冷房やストローの袋また畳む

漢文学習のすゝめ

● 國學院大學文學部教授

赤井益久

(あかい・ますひさ)

一 漢文学習の意義

言うまでもないことであるが、「国語」は「言葉」を教える教科である。

これもまた自明のことであるが、「言葉」は概念の把握や物事の認識をつかさどる。したがって、觀念形成や倫理秩序の理解に不可欠であり、感情や思想は言葉によって表明され、人間同士のコミュニケーションの主要な手段となる。人間にとって生きる上でのもつとも大切にして根底に関わると言つてよい。その教育が、いま軽視されている。

中等教育から高等教育にかけてグローバル化が叫ばれ

ているが、国際化は同時に自己の文化への深い理解の上に立脚することを忘れるべきではない。同時に言語活動は、国際化という空間に広がるだけでなく、時間軸にも広がっていることにも思いを致すべきであろう。

古典教育はその意味で、じつに効果的であることを指摘したい。自国の文化理解と言うけれども、それは文学や歴史、古今の生活への理解を通してはじめて地に着いた知識となる。また、対的かつ批判的視点をもってみずからを見つめることができ、はじめて相互理解がかなう。古典教育としての「古文」「漢文」は、その教材の宝庫であると言つてよい。

受験科目から漢文をなくせば受験生が増えるといった迷信は、日本人が生きる上で欠くことのできぬ言語活動の歴史性と対的認識を学ぶ機会を生徒諸君から奪つたのである。また、実際の日常には役に立たぬという謬見は、おそらく浅薄狭隘な言語観によるもので、我々の使用する言語そのものはすでに悠久な歴史と数多の蓄積の上にある。

したがって、現在の我々を取り巻く卑近な言語活動のみに注意を奪われてはならないのであって、広く古典に視野を広げることによって逆に相補的な効果を期待できるのであり、迂遠な道のに見えてじつは捷徑なのであ

る。

二 古文学習との連携および文法の要点

古典の時間数が削減されていく中、効果的な学習計画を立てる必要がある。

漢文は中国の文語文をわが国の古典文法に従って読む方法であるから、古文の学習と連携することによって互いに効果を期待できる。具体的な例を挙げれば、三省堂『新編国語総合』により古文で学習する助動詞を示すと三十二あり、このうち漢文学習で学ぶべきは、受け身「らるる」、使役「しむ」、打ち消し「ず」、完了「たり」、推量「む（ん）」、断定「たり・なり」、伝聞推定「なり」、比況「ごとし」のほぼ十であり、若干の出入りがあったりも古文学習の三分の一は漢文学習で頻出する。したがって、古文学習と連携することでそのニュアンスの相違や語感を効率的に学習できるだろう。

漢文は、いったん定着するとその読み方が踏襲される傾向にある。使役の「す・さす」は使用例がごく少なく、音読されるサ変型動詞は「しむ」に集約される傾向にある。漢字音の音読動詞の多用は日本語彙を飛躍的に増やした。サ変型動詞は漢文学習でマスターしたい。受け

身構文は動作者と被動者の違いを漢文では明確に意識する。「為人（人となり）」の「為」の意味を解釈する際に、古文の「たり・なり」の知識はおおいに参考になる。

また、漢文では主格の「が」は登場せず、所有格の「が」だけが現れる。副助詞は「のみ」（限定）「すら」（抑揚）「まで」（範囲）「ばかり」（程度）が用いられ、その他の用例はないといつてよい。再読文字は「未」「将」「当」「応」「宜」「須」「猶」「蓋」の八つであり、本来の中国語としては一字を二度読むわけではない。いわゆる陳述の副詞を助動詞と共に把握した先人の語感には鋭いものがあり、例えば「未」を「いまだ」（せ）ず」として読んだ解釈はいわゆる時間副詞を意識した打ち消しで、過去に遡って否定している語感がよく分かる。「将」も「まさに」（せ）んとす」と解釈したのも動作の進行や状態をよく言い表している。

文法的な事項は、基本文型は五つと考えられるが、「主語＋述語」構造、述語が目的語を取る「述語＋目的語」構造の理解をするのが基本である。句法的には否定形↓使役形↓受け身形↓疑問・反語形↓仮定形↓比較形↓抑揚・累加形へと進むと効果的である。使役と受け身は、ある動作を上下の方向性から見た場合、上から下に及ぶのが使役、下から見た場合が受け身となる。目前の事柄

を前提にそれを否定して強調する反語は、中国人の好む言い方である。

三 漢文学習の方法

朗読の多用と「辞書引き」作業を勧めたい。

漢文の文献がわが国に舶載され、その受容を通して日本語の表記の定着に漢文が大きな影響を与えてきたことはすでに自明なことである。したがって、日本語の形成過程においては、和文脈のみならず漢文脈がその発展形成に大きく寄与した。そのリズムや語感を体得することは、今日の言語活動に大いに資するものがある。不慣れを恐れる必要はない。国語の修得は、反復練習にある。発語は言語活動の基盤であると同時に、呼吸は句切れと密接に関係する。日常言語と異なる古典語に親しむことによって、抽象的で高次の言語活動に慣れることができる。まずは教師が二度ゆつくりと範読し、のち段落ごとに斉読すると良い。「あに…せんや」「…するあははず」「…せずんばあらず」などの言い方に慣れる。やがて意味とリズムが合致するようにしたい。

「辞書引き」作業の効能は三つある。一つは、作業であるので個人の能力を基本的に問わない。二つ目は電子

辞書にはない一覧性が、漢字をビジュアルで認識し、部首や漢字構成について全体的構造的な理解を得やすい。また、辞書によって得た文法的な知識は、記憶する際に合理的な説明によれば忘れにくい。

たとえば、『新編国語総合』の漢文教材に出てくる「是」は、①「是亦走也。(是も亦た走るなり)」「(五十歩百歩)②「何日は帰年。(何れの日かは是れ帰年ならん)」「(杜甫、絶句)③「疑是地上霜。(疑ふらくは是れ地上の霜かと)」「(李白、静夜思)④「匡廬便是逃名地。(匡廬は便ち是れ名を逃るるの地)」「(白居易、香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁)⑤「自是之後、客皆服。(是よりの後、客皆服す)」「(鶏鳴狗盜)の五例であり、三省堂『全訳漢辞海』を調べてみると、①⑤が代名詞であって「人・事物・時間・場所」などを示す。②③④は、断定・判断をしめす動詞であり、「繫辞(けいじ)」。肯定判断を表し、英語のbe動詞に相当する。」と説明している。同じ「これ」「この」と訓じても、「之」「此」には後者の意味はない。古典教育は国語教育の一環として、若人の言語活動の重要な育成を担っている。けっして看過すべきではなく、軽視すべきではない。

私の「現代語」教科書

〔言語事項〕に留意した「表現」授業

●群馬県立沼田女子高等学校教諭

野村耕一郎

(のむら・こういちろう)

●「現代語」から受け継がれるべきもの

「現代語」は、この三月まで細々とながらも全国の高等学校で開設されていた。「まだそんな科目が残っていたのか」と感じる先生方がほとんどであろう。実際、「現代語」の学校現場での開設状況は、当初から惨憺たるものであった(＊1)。しかし、「現代語」の目指したものの、指導内容には、注目すべきものがあつた。

第一に、「現代語」は、革新の精神に満ちあふれていた。科目新設の構想段階から、「現代語」にはさまざま

な困難があつたとき(＊2)が、最終的に「国語I」の「言語事項」を補充、深化、発展させる(平成元年版学習指導要領)という明確な性格付けがなされた。「言語事項」の内容は、従来、教科書においてはコラムのように扱われがちであつた。また、授業においても、ややもすると、常用漢字の読み書き、文法といった指導内容に偏りがちな傾向があつたのではなからうか。「現代語」からは、そんな「言語事項」の扱われ方の状況を、正面から変えてゆこうとする意気込みが感じられた。そして、学習指導要領をうけて教科書が編集される段階でも、その精神はしっかりと受け止められた(＊3)。

第二に、「現代語」は、世界の中の日本語という視点に貫かれていた。平成元年版学習指導要領が練り上げられてゆく時期は、日本が好景気にわいた時期に重なる。経済的繁栄を背景に、「日本語はますます世界的に使われるようになるに違いない」といった意見が多く語られたところが、今日あるように景気が低迷するや、うってかわつて「小学校から英語教育を」という話題が中心となる。世間的な〈気分〉としてはそれでもいいのかもしれないが、国語教育は、〈気分〉をくみとりつつも、〈気分〉に左右されてふらついてはならないであろう。むしろ、こ

れからこそ、世界の言語状況のなかで、冷静かつ客観的に日本語を考えてゆく必要があるのではないか。幸いにして、現行学習指導要領でも、特に「国語表現Ⅰ・Ⅱ」にその視点は受け継がれている。

●私の「現代語」教科書

筆者は、前任校の群馬県立新田暁高等学校で「現代語」を担当した。授業では、右で述べた「現代語」の精神・視点を大切にして、年間の指導を展開した。前任校は総合学科高校であり、生徒一人ひとりが自分の進路にあった科目を自ら選び、時間割を作成する。平成十六年度にこの授業を履修した生徒は、三年次生徒十四名（男子四名、女子十名）であった。希望進路は、進学・就職でちょうど半々である。（選択授業であるため、年によって受講生徒の人数・希望進路等は一定ではなかった。）時間割編成の都合から、「現代語」（二単位）の授業は週に一回、二時限続きで行った。

年間の授業展開を、教科書の目次風にまとめて下に掲げる。「Ⅰ」をつけた教材は、使用した教科書『高等学校 現代語』（角川書店）に収録されている。）

1	現代語入門
	・ 日本語の表記
	・ 日本語で用いる符号と句読点
	・ 日本語の音節
2	和語・漢語・外来語
	・ 「外来語」（多田 道太郎）
	・ 漢字の音
	・ 漢語の組み立て
3	言葉と社会
	・ 「よろしく」（森本 哲郎）
	・ 苦情 言うとき言われるとき
	・ 中学生に対して敬語を使うとき
4	話し言葉
	・ 「話し言葉の特徴」（畠 弘巳）
	・ 方言発見
	・ 「標準語の成り立ち」（上村 幸雄）
5	世界の中の日本語
	・ 「翻訳は可能か」（千野 栄一）
	・ 「日本語が国際語になるには」（アントニオ・アルフォンソ）

● 授業の実際

筆者が特に工夫をこらしたのは、3・4章である。紙幅の関係から、ここでは、「苦情」を取り上げた授業について説明したい。

われわれの言語生活をふりかえってみると、言葉は、必ずしも和やかに使われていない。しかし、常に和やかな関係が結べる言葉が求められているのも事実であろう。だからこそ、「国語表現」で手紙の書き方、電話のかけ方、話し合いのしかたが取り上げられるのではなからうか。

「苦情」の授業は、言葉をみずえ、その先へもう一歩踏みこんだ試みである。

授業は二時限連続一回の完結とした。新聞記事^(＊4)をもとに、①記事で紹介されている苦情の受け方、苦情の言い方を整理し、それをもとに、②アルバイトをしているときにいやな苦情の言われ方はどんなものか、自分ならどんなふうに苦情を言うかを考えさせた。現代の高校生が「苦情」に身近な位置にいることは予想以上であった。社会全体を見回すと、捨てぜりふ、はぐらかし、意図的な意味不明発言等、不愉快な言葉がはびこっている。

授業を通して、不愉快な気持ちを和やかに相手に伝える術を、われわれはもつと考えていく必要があることを再認識させられた。

今後、筆者は「言語事項」について「国語総合」「国語表現Ⅰ・Ⅱ」の授業等ですっかりと位置づけてゆけたらと考えている。ご意見をいただければ幸いである。

〔参考文献〕

＊1 「グラフで見る学校現場の「現代語」」（日本語学）一九九七・五月号、明治書院

＊2 「旗手的役割を担った「現代語」の命運」（大平浩哉『国語教育改革論』一九九七、愛育社）

＊3 たとえば、野元菊雄ほか編『現代語』教科書（一九九四、三省堂）。

＊4 「朝日新聞」二〇〇二・十一・二「お作法 不作法」に掲載。

本稿は、二〇〇五年一月二十九日に開催された早稲田大学国語教育学会研究会「国語教育史と実践に学ぶ会」における口頭発表の内容を、参加者からいただいた意見をふまえて改訂・縮約したものである。

今どきの高校生の語彙力

〈国語力向上事業研究・語彙力調査から〉

●筑波大学附属高等学校教諭

鎌倉芳信

(かまくら・よしのお)

春床一刻値千金——意味(春、起、き、る、前、の、布、
の、中、の、一、瞬、は、千、金、も、の、値、打、ち、が、あ、る、)。

三省堂『新編国語総合』に名文として紹介されているものを、後に試験した際の解答。なるほど、である。もともと文系の大学生でもこんな答はけっこう多いらしいから、高校生の勉強不足ばかりを嘆くわけにもいかない。生徒に「春宵」の実感がないのである。だから、「春の夜は まだ宵ながら、明けぬるを 雲のいずこに 月やどるらむ」(百人一首)の歌、「宵ながら」の意味の解答に、「まだ夜なのに」「まだ暗いのに」という答が圧倒的に多いのだろう。日暮れから夜中までを「宵」という時間意識は今の高校生から完全に消え失せている。

こうした状況をたびたび味わうものだから、国語科で生徒の語彙力調査をしてみた。以下は調査の結果の簡単な紹介である。

語彙は、「漢語」「和語」「カタカナ語」「諺・慣用句・四字熟語」の四分野から。調査は、「読めるか」「意味がわかるか」「正しい使われ方がわかるか」「語彙を選択できるか」「適切に表現できるか」の五項目。

○「未曾有」「風聞」「焦眉」など死語に近い
けっして特殊なことばではない。「未曾有の大惨事」など「未曾有」はよく聞くことば。先のスマトラ沖地震の報道でもこのことばを多く耳にし目にした。しかし単語では読めない。読めないということは正確に意味を理解していないということ、大惨事のニュースを生徒はどう理解していたのだろうか。

「風聞」にしても、「風聞に惑わされなくて」などと使うが、果たして生徒はこうした惑いに陥ったことなどないのだろうか。

「焦眉」にいたっては、40%の者しか読めない。「焦眉の急」となればあるいはもっと正答率が上がるかも知れないが、「焦眉の急」の意味を理解しているかどうかは不安。

○和語は大の苦手

「なおざり」「したり顔」「かこつ」「おしなべて」「うらぶれた」「つとに」「やつす」「うがつ」など、意味や使われ方が理解できている生徒は半分以下。「なおざりな」を「ざつくばらんに」と混同したり、「したり顔」を「えびす顔」と同じ意味に理解したりする。「かこつ」はもつとも正答率が悪がったが、「不満をぶちまける」の意味で理解している者が多数。「かこつ」の響きには「ぶちまける」に通じるものがあるのだろうか。

和語を使つての表現となるとその能力は格段に落ちる。「たそがれ」を「しょんぼりしている」の意味で理解しているのだろうか。「悲しい気持ちで、彼はたそがれていた。」とか「やがて夕日が沈み僕はたそがれるのをやめた。」など、理解に苦しむような誤用は多い。しかし、「空はたそがれ色に染まっていった」となると、果たして誤用と言えるかどうか悩むところだ。「たしなみ」では、「私は、たしなみを整え、入学式に参加した。」「私は、たしなみをするのが大好きです。」「私は、彼のあまにひどい行動をたしなんだ。」「たしなめる」との混同と思われる。)などという誤用が多い。

意味をきちんと理解せず、ただ語の響きや語感からの

イメージでことばをとらえていることに起因する間違いがほとんど。和語は日本の伝統的な美観や美意識に根ざしているものだけに、残していかなければならない。しかし、調査結果を見ると、国語の指導上組織的に工夫し取り組まないと将来たいへんな事態になっているのではないかと危惧される。

○カタカナ語は好き

「アイテム」「モチベーション」「フェミニズム」「ネガティブ」「イベント」「ニーズ」「リスク」等、カタカナ語は意味・使い方・それを使った表現ともよくできる。和語と比較すると驚くほどの違いがあり、生徒の日常生活の一端がうかがえる。生徒はカタカナ語をかなり自由に抵抗なく使いこなし、コミュニケーションの重要な要素としているようだ。しかし、それは日常生活のレベルでのこと。国語力という観点からすると喜んでばかりいられない面もある。意味の正答率が60%から80%と、あまりよくないカタカナ語をあげると、「コンセンサス」「インフォームドコンセント」「バリエーション」「エゴイズム」「グローバル」など。

注意したいのは、これらのカタカナ語は、必要な術語であつたり、読解・思考には欠かせない語であつたりす

ることだ。こうした語が生徒に十分に浸透していない事実は深刻だ。「エゴイズム」の意味が理解されていないとすれば、『羅生門』は果たして理解できるのであろうか。まして漱石の小説を読むことなど絶望的ということになる。「ジェンダー」(58%)「レトリック」(59%)に至っては60%以下の正答率である。

○諺・慣用句・四字熟語には指導の成果が

この分野の理解力・使用能力は他の分野に比べて比較的高い。これは小学校時代からの学習の成果だろう。それゆえ、出来のよくなかったものだけをあげてみると、「お茶をにごす」「けんもほろろ」「足元を見られる」「鼻持ちならない」など。「鼻持ちならない」(28%)の理解は三割以下の正答率。当然この語句を使つての表現は出来ない。「今年の花粉は鼻持ちならないらしい。」など笑つてしまう答案もある。小学校で同時期、同形式で小学生向けに行つた調査では、「顔にどろをぬる」を「あまりのくやしさに友達の顔にどろをぬる」とか、「板につく」を「(かれ)の板について歩いていこう」(4年)などという、笑えない珍答があった。どちらも、ことばを表面的にのみとらえ、背後の意味をまったく理解していないものだ。諺や慣用句などは、いったんそのことばの

なりたちを含めて理解させれば定着するものなので、何をどこでどう確実に教えるかであろう。

漢語の慣用句になるとおぼつかないものが増える。「老婆心」の意味を「やさしい心」と捉える者が24%いる。したがつて、この語を使った表現では「『彼の幼稚な行動に対して』老婆心がくすぐられた」のような答が多い。また、「破天荒」は「とんだ破天荒の日の出発となつてしまった」を正しい使い方とした者が29%もいる。「雪辱」を使った表現で「雪辱をはらす」と書いた者は64%。「雪辱を果たす」のように、ひと続きの慣用表現として理解定着させる必要があるだろう。

○大人の常識は生徒の非常識

以上、調査の一端を紹介したが、私たち大人にとつては常識と思われることも生徒にとつてはけつして常識ではない。「社会の教科書の文章が難しい」と言う生徒はけつこう多いと聞く。先述の小学校の調査では「エチケツト」を知らない児童が多数いた。古文の「現代語訳」を普通に「日本語訳」と言う高校生だから、語彙の指導は私たちにとつて当然の言語感覚が通用しないと見て注意深くしなければならぬと思う。(文部科学省指定の筑波大附属小中高国語科「国語力向上事業研究」から)

わたしを語ることばを求めて

牲川波都季・細川英雄 著／四六判・304ページ／
2,310円(税込)／ISBN 4-385-36198-3
早稲田大学本庄高等学院三年生の「日本語表現総合」の授業実践と観察の記録。授業担当者・観察者である著者と生徒とが、内省と他者との関わりを通して「わたしのことば」を獲得していくドキュメント。

声を読もう 声で描こう

——朗読のための17の菜
西川小百合・松丸春生 著／B5変型判・152ページ
(CD一枚付き)／1,695円(税込)／ISBN 4-385-36182-7
待望の朗読・読み聞かせの入門書。朗読による言語活動の活性化の可能性と、文字を覚えることで失ってきた「声の力」を取り戻す手だてを、易しい理論と実践から楽しく学ぶ。著者による朗読を付録CDに収録。

ことばの学びと評価

国語科授業への視角

高木展郎 著／A5判・176ページ／
2,205円(税込)／ISBN 4-385-36178-9
新教育課程と新指導要領の実施で教育現場は新しい歩みを踏み出した。課題の中心となっている「新しい評価観」「コミュニケーションの重視」に正面から向き合い、実践的に教科指導の新しい展望を示した論考の書。

国語科授業構想の展開

町田守弘 著／A5判・256ページ／
2,520円(税込)／ISBN 4-385-36188-6
長年にわたり中学校・高等学校の教員をつとめた著者が、学習者中心の「授業構想」を提案する。サブカルチャーの素材を積極的にとりいれ、現場の変化に対応した「授業構想」の具体的実践例を多数掲載。

表現する高校生

対話をめざす教室から

中渕正堯・国語論究の会 著／A5判・296ページ／
2,625円(税込)／ISBN 4-385-36149-5
表現活動によって教室を活性化する「32」の事例集。生徒の表現を素材に、「学習指導の展開」では授業展開を、「評価」では表現を評価する観点を、そして「発展」では発展学習案を多角的な視野で提案する。

三省堂高校国語教育 二〇〇五年春号

二〇〇五年四月三十日発行
【定価】……八〇円(税込)
【編集・発行人】……八幡統厚
【発行所】……株式会社三省堂
〒一〇一―八三七―一
東京都千代田区三崎町二丁目二番一四号
電話／〇三(三三三〇)九四二七(編集)
振替／〇〇一六〇―五―五四三〇〇

[学習] 機能を飛躍的に充実! 高校生用国語辞書 勢揃い!!



生きのよい現代語満載。
収録語数7万6千。
2,625円小型版2,415円

小型国語辞典のトップセラー。全面改訂 [第六版] 新発売!
シャープな語釈、実感あふれる用例に定評。

特装版 並版

特装版(白)と並版(赤)は同じ内容です。
各3,045円小型版2,835円



大型国語辞典の最高峰!
〔並〕新装版7,300円



学習古語のトップセラー。
2万1千項目収録。
2,730円小型版2,079円



徹底した学習指向の
最上級古語。
2,835円



教科書に合わせた
全面改訂版。
1,995円



語彙の力を高める
新学習国語の最新版。
2,835円



伝統ある最強の学習古語。 2,940円
 例解方式で理解する学習古語。 2,625円
 字形から引ける本格漢和。 2,940円
 ポケット版 1,890円

辞書は三省堂

〒101-8371
東京都千代田区三崎町2-22-14
TEL.03 (3230) 9412 (営業)
大阪 TEL.06 (6341) 2177
名古屋 TEL.052 (252) 9211・9212
九州 TEL.092 (531) 1531・1532
札幌 TEL.011 (616) 8722
(価格は税込)



親字1万、熟語8万を収録。
用例に現代日本語訳付。
最新「人名用漢字」資料付き。
2,982円